

## 【要旨】

現代日本語は目的語にのみ後続しうる形態素「のこと」をもつ。「のこと」は共起する目的語名詞に対し、有生性や定性の制限を課す。また、「のこと」は対格が現れない統語環境では同様に現れえない。これらの意味的・統語的特性は示差的目的語表示のマーカーにもみられる。本発表では、「のこと」をスペイン語の示差的目的語表示のマーカーと比較し、その共通性を明らかにすることで、「のこと」が示差的目的語表示マーカーであることを主張する。この分析により、「のこと」の特性を原理的に説明し、新たな言語普遍性を見出す。また、示差的目的語表示の文法変化と日本語の目的語表示の通時的研究を基に、現代日本語は示差的目的語表示言語として初期段階と最終段階が混在していることを主張する。

## 1. はじめに

- 日本語において、「のこと」という目的語のみに付随する形態素がある<sup>12</sup>。

- (1) a. 太郎が花子のことを探している。  
b. \*太郎のことが花子を探している。

- 名詞+「のこと」が示す統語的・意味的特性について多くのことが明らかになっている。本発表では、「のこと」が通言語的には示差的目的語表示 (Differential Object Marking: 以下、DOM) として分析することで、その特性を原理的に説明することが可能であり、日本語は DOM 言語として分類されうることを示す。

## 2. 「名詞+のこと」の特性

- 「名詞+のこと」の意味的特性
  - ▶ 「名詞+のこと」における名詞が有生名詞の場合は自然であるが、非有生名詞の場合は不自然に感じられる (日高 2006, 湯本 2015)。

(2) 太郎は{花子/\*携帯}のことを探している。

  - ▶ 「名詞+のこと」において名詞は特定のでない(笹栗 1999)。

(3) a. 太郎がお嫁さんのことを探している。  
b. 太郎がお嫁さんのことを探している。 (笹栗 1999:167)

(3a)において、「お嫁さん」は「現在結婚している妻」(特定の)と「将来の結婚相手」(非特定の)の2つの解釈が可能であるが、「のこと」がついた(3b)における「お嫁さん」は後者の解釈が不可能である。
- 「名詞+のこと」の統語的特性
  - ▶ 「名詞+のこと」は受動化した主語には現れない(笹栗 1999)。

<sup>1</sup> 本発表では、(1)における「のこと」を1つの形態素であると仮定する。以下の与格の「の」と形式名詞「こと」との区別に注意されたい (湯本 2015 を参照)。

(i) 太郎が花子のことを話した。

湯本(2015)で言及されているように、(i)の「のことを」は「について」で置き換え可能であるが、(1)の「のことを」は置き換え不可能である。

(ii) a. 太郎が花子について話した。

b. \*太郎が花子について探している。

本発表では、(iib)のような置き換えが不可能であるタイプの「のこと」を議論の対象としている。

<sup>2</sup> 主語と同様に主格が付与される主格目的語も「のこと」と共起可能である。

(i) 太郎が花子のことが好きだ。

(4) \*花子のことが太郎に愛されている。

(笹栗 1999:163)

➤ 「名詞+のこと」はイベント名詞句内には現れない(笹栗 1999)。

(5) \*太郎の花子のことの観察 (cf.太郎は花子のことを観察した。)

### 3. 「のこと」と DOM

前節で観察された「名詞+のこと」における特性は、スペイン語における「名詞+示差的目的語表示マーカ (Differential Object Marker: 以下、DO マーカー)」における特性と同質であることを明らかにする。

● DOM とは、Bossong(1985, 1991)以来知られている用語であり、名詞の特性に基づいて差別的に目的語表示を行う現象のことである。一般に、以下の有生性(Animacy)と定性(Definiteness)のスケールにおいて、左側に分類される名詞ほど目的語表示が行われる傾向がある<sup>3</sup>。

(6) 有生性スケール  
人間 > 動物 > 無生物

(7) 定性スケール  
人称代名詞 > 固有名詞 > 定(definite)名詞 > 不定(indefinite)特定(specific)名詞 > 非特定(nonspecific)名詞

(Aissen 2003: 437)

● 例えば、スペイン語は形態素 a を用いて典型的な DOM を示す。スペイン語 DOM は以下の特性を示す。

➤ 人間を表す定名詞は義務的に目的語表示が行われるが、無生物を表す名詞には定性に関わらず目的語表示がおこなわれない(Von Heusinger and Kaiser 2005)。

(8)a. Vi      \*(a) la    mujer.                      b. Vi      (\*a) la/una    mesa.  
見た.1sg A DEF 女性                      見た.1sg A DEF/IND 机  
「私はその女性を見た。」                      「私は机を見た。」

(8a)の目的語名詞は人間を表し DOM が義務的である。それに対して、(8b)の目的語名詞は無生物を表し DOM は生じえない。(8a)と(8b)の対比は、スペイン語の目的語表示の背景に有生性のスケールが関係していることを示している。

➤ 目的語が人間を表す名詞であっても、(8a)とは異なり不定である場合、目的語表示が義務的ではなくなり、(9)のように多くの場合省略される(von Heusinger and Kaiser 2005)。

(9) Vi      (a) una    mujer.  
見た.1sg IND 女性  
「私はある女性を見た。」

(8a)と(9)を比較して、目的語表示の義務性に相違があることは、それが定性のスケールとも関連していることを示している。

● また、スペイン語の DO マーカーは以下の2つの統語的性質を示す。

➤ 受動化した主語とは共起しない<sup>4</sup>。

(10)a. Yo veo a la    mujer.                      b. La    mujer fue                      vista.  
私 見る A DEF 女性                      DEF 女 COP.PST 見られた  
「私はその女性を見た。」                      「その女性は見られた。」

<sup>3</sup> 主題性も DOM と相関性がみられることが多くの言語で観察されているが (Dalrymple and Nikolaeva 2011 など)、ここでは議論の対象外とする。

<sup>4</sup> スペイン語の受動文は、主に内項が無生物名詞である場合に用いられ、DOM の対象となる名詞が受動文の主語となることがほとんどない (Fábregas 2013)。

- イベント名詞句内では目的語表示はおこなわれず、項関係は de を用いて表す。

(11) a. El perro capturó a Juan.

DEF 犬 捕まえた A ジュアン  
「その犬がジュアンを捕まえた。」

b. La captura de Juan por el perro fue sorprendente.

DEF 捕まえる GEN ジュアン によって DEF 犬 COP.PST 驚き  
「その犬によるジュアンの捕獲は驚きだった。」

c. \*La captura a Juan por el perro fue sorprendente.

DEF 捕まえる A ジュアン によって DEF 犬 COP.PST 驚き

(López (2018: 85-86))

- これらのスペイン語における DO マーカーを 2 節でみた現代日本語における「のこと」と比較すると、以下のような共通点が見いだされる。

(12) a. 名詞の生物性に関する制約がある。

b. 名詞の定性に関する制約がある

c. 目的語を表示する形態素である

d. 受動文主語には付属しない

e. イベント名詞句内では出現しない

私はこれらの同質性から、現代日本語における「のこと」が通言語的には DO マーカーに対応していると主張する。この主張が正しいとするならば、「のこと」についての意味的・統語的特性は、それが DO マーカーの役割を担っているためであると原理的な説明を与えることができる。また、目的語表示における通言語的な普遍性が新たに明らかになったといえる。

#### 4. DOM と文法化

- これまで現代日本語における「のこと」が DO マーカーであると主張してきたが、説明すべき以下の課題が残っている。

(13) a. なぜ「のこと」の出現が義務的である環境がないのか

b. なぜ日本語は既に対格の助詞「を」を保有しているが、役割が重複するように思える DO マーカーも文法システムに取り入れているのか

- (13a)に関して、スペイン語を含む多くの DOM は義務的に発生する環境があることが多い。しかしながら、「のこと」の出現が義務的である環境はない。この点は、「のこと」が実際に DO マーカーであるかどうかの妥当性が損なわれる。
- (13b)に関して、日本語は対格の助詞を保有しており、「のこと」が DO マーカーであるならば、日本語は 2 つの目的語表示マーカーをもつことになる。これは、現代日本語がこのような 2 つの目的語表示を文法システムに取り入れ、役割の重複する言語計算をおこなっていると仮定せねばならず、言語理論における経済原理(Chomsky 1995)の観点から、容易には受け入れ難い。また、DOM 言語を見ても、DO マーカー以外にも対格表示形態素を持つ言語は観察できない。

- 私はこれらの課題がスペイン語の DOM と日本語の対格の助詞「を」における通時的な研究から、解決可能であることを論じる。

##### 4. 1 スペイン語 DOM の通時的な研究

まず、スペイン語の DO マーカーが言語変化を通じて前接する名詞に対する意味的制約が緩くなっていることを確認する。

- von Heusinger and Kaiser (2005)は、12 世紀に書かれたとされる叙事詩『Poema de mio Cid』における古代スペインのテキストデータにおいて、現代スペイン語では義務的に DOM を行わねばならない(9a)のような高い有生性と定性を併せ持つ目的語に対して、DO マーカーが現れていない例がみられることを述べている。以下の(14)がその 1 例である。それに対して Alfonso Reyes (1976)によって翻訳された(15)では、対応する目的語に DOM が確認できる。

(14) En brazos tenedes **mis hijas** tan blancas como el sol.  
 中に 腕 持つ.PRES.2PL **私の娘たち** 同じくらい 白い ように DEF 太陽  
 「あなたの腕の中には、太陽のように白い私の娘たちがいる。」

(15) tenéis **a mis hijas**, tan blancas como el sol, en  
 持つ.PRES.2PL **A 私の娘たち** 同じくらい 白い ように DEF 太陽 中に  
 vuestros brazos  
 あなたの腕  
 「あなたの腕の中には、太陽のように白い私の娘たちがいる。」

このような事実は、スペイン語の DOM が、目的語の名詞に課す意味的制限が緩くなる変化を辿っていることを示している。

#### 4. 2 日本語の対格の通時的研究

●次に、上代語における対格の助詞「を」の出現分布に関わる研究を概観する。上代語の対格の分布は、特定の意味的・統語的な特性に相関があると分析する研究がある (Motohashi 1989, Yanagida 2006, Yanagida and Whitman 2009, Frellesvig, Horn and Yanagida 2015 など)。

- Motohashi (1989)は上代語の対格の分布は(16)や(17)にあるように、名詞の定性(definiteness)や参照性(referentiality)と相関があることを指摘している(Yanagida 2006 も参照)。Yanagida and Whitman (2009)は、(18)のように、疑問詞との出現が可能であることを観察し、実際には名詞の特定性(specificity)に相関があることを主張している。

##### Definite vs. Indefinite

(16) a. 繁山の谷へに生ふる山吹をやどに引き植ゑて(万葉集 4185)  
 b. 一本のなでしこ植ゑしその心誰に見せむと思ひそめけむ(万葉集 4070)

##### Referential vs Nonreferential

(17) a. わが背子は仮廬作らず草なくは小松が下の草を刈らさね(万葉集 11)  
 b. 赤見山草根の刈り除け逢はすがへ争ふ妹しあやにかなしも(万葉集 3479)

##### Specific vs Nonspecific

(18) a. 潮干なば玉藻刈つめ家の妹が浜づと乞はば何を示さむ(万葉集 360)  
 b. 奥山の真木の板戸を押し開きしゑや出で来ね後は何のせむ(万葉集 2519)

- Frellesvig, Horn and Yanagida (2015)は、Yanagida and Whitman (2009)の主張する特定性を Discourse-Linking(以下、D-Linking)(Pesetsky 1987 他)と捉え、「を」の分布を分析することで、上代語が DOM システムを持っていたことを主張している。例えば、以下の(20a)は目的語に関係節が修飾しているため、D-Linking が満たされているが、(20b)は目的語には修飾要素がなく総称を表しており、D-Linking が満たされない。

(19) D-Linking:

a relationship between an NP and a definite discourse referent, whereby the possible reference of that NP is restricted. (ある NP と明確な談話の指示対象との関係性であり、その NP の可能な参照が制限される。)

(Frellesvig, Horn and Yanagida (2015: 198)、日本語訳は独自に作成)

(20) a. 我が君に戯奴は恋ふらし賜ばたる茅花を食めどいや瘦せに瘦す(万葉集 1462)  
 b. 瓜の食めば子ども思ほゆ栗の食めばまして偲はゆ(万葉集 802)

- Sadler (2002)による調査では、11世紀に紫式部によって書かれた『源氏物語』(源氏1)と1723年と1964年に書かれたその翻訳(それぞれ源氏2,源氏3)の第1章と2章におけるテキストデータを比較することで、対格の助詞「を」の出現は定性と強い相関を示しながら通時的変化

を経験していることを明らかにしている<sup>5</sup>。その結果は以下のようになっている<sup>6</sup>。

(21)名詞の参照性に基づく「を」の分布

	Referential	non-referential
源氏 1	86.3%(44/51)	40.9%(9/22)
源氏 2	93.4%(85/91)	50.0%(19/38)
源氏 3	100%(72/72)	89/7%(35/39)

(Sadler (2002: 261)に基づいて作成)

この調査は、中世から現代にかけて日本語の格助詞「を」が、スペイン語の DO マーカーにみられたように、徐々に付属可能な名詞の幅が広がっていていることを示している。

- Frellesvig, Horn and Yanagida (2015)に従い、日本語の対格はかつては DO マーカーであったとするならば、Sadler (2002)の研究は、日本語の対格は、スペイン語の DO マーカーのように、名詞に課す意味的制限が緩くなる変化を辿り、現在のあらゆる名詞を目的語表示するマーカーとなったことが考えられる。

#### 4. 3 提案

- Frellesvig, Horn and Yanagida (2015)における日本語が DOM システムを保有していたとする議論に基づき、私は日本語の目的語表示について以下の提案をする。

(22)提案 1:

現代日本語における対格の助詞「を」は DO マーカーとして文法変化における最終段階にある。(それゆえ、意味的な制約なしで目的語表示をおこなう。)

(23)提案 2:

日本語は DOM 言語の文法サイクルとして、「のこと」を次の後継者として選択し、DO マーカーとして文法に取り入れようとしている。

- 文法化の研究において、文法はサイクル的傾向を示すことが指摘されている (Van Gelderen 2011, Roberts 2022 他)。より正確にいうならば、ある文法的要素が文法変化を経験することで、徐々にその文法機能を失い、別の新たな要素が従来の要素を補うように文法化し、それが時を経て従来の文法要素と同じように言語変化を辿ることが様々な現象で確認されている。
- DOM の言語変化について、Bossong (1991:152-153)は、「一度統一的マーカーとなった DO マーカーはもう一度 DOM をおこなうことは少なく、何らかの理由で DO マーカーが消失した際には、新たな DOM システムが文法化する。」といった趣旨を述べている。DOM もサイクル的な文法変化を辿ることが考えられる。
- Van Gelderen (2011)は多くの DO マーカーが接置詞に由来することを指摘し、以下のような DO マーカーの再分析傾向があると主張している。

(24) DOM Cline

接置詞 > 内在格 > DOM

(Van Gelderen 2011: 178)

<sup>5</sup> 「源氏 1」は、11 世紀に紫式部によって書かれた原作『源氏物語』である。このテキストは「日本古典文学大系」シリーズから取られており、14 世紀の写本である実隆青表紙抄本に基づいている。「源氏 2」は『紫文蚕之囀』というタイトルで 1723 年に多賀半七によって作成された未完の翻訳で、『源氏物語』の最初の 2 章のみから成り立っている。このテキストは「珍書刊行会叢書」第 1 巻から取られている。「源氏 3」は『新・新訳源氏物語』というタイトルの谷崎潤一郎による 1964 年の第三訳である。

<sup>6</sup> Sadler (2002)の研究によれば、「を」の分布が名詞の有生性とも関連して変化していることが確認できる。現代日本語以前の対格と名詞の有生性における明確な関連性を検討することは、今後の研究の課題としたい。

- ▶ López (2012)は DO マーカーが単語レベルでの名詞句内の投射では Kase Phrase (KP)主要部を占めると仮定している。López に従い、私は完全に文法化した DO マーカーは KP 主要部を占めるとするが、「のこと」は単語レベルの名詞句内の投射では、後置詞の主要部位置(すなわち P)を占めると主張し、(24)における DOM の文法化サイクルの「接置詞」の段階にあると仮定する。すなわち、「のこと」は DO マーカーとして確立する前の段階にあるとする。そして、かつて DO マーカーであった助詞「を」を KP の主要部を占めると仮定する(Saito (2018)も参照)。

(25) [KP[PP[DP 花子] P のこと]K を]

- 「のこと」が DO マーカーの初期段階にあることを示す経験的証拠として、それが格助詞ではなく後置詞の形態的特性を示すことがあげられる。後置詞と格助詞の形態統語的特性は以下のような差異がある。

- ▶ 第 1 に、後置詞は(B)のように格助詞を後続できるが、格助詞が別の格助詞を後続する事はみられない。

(26) a. ここからが富士山に登りやすい。  
b. 5 時までが運賃が安い。

(Saito 2016: 5)

- ▶ 第 2 に、後置詞は副助詞「は」を後続できるが、格助詞は後続できない。

(27) a. 駅からは太郎が向かった。  
b. \*花子をは太郎が探している。

- ▶ 第 3 に、Sadakane and Koizumi(1995)が指摘しているように、後置詞がついた名詞からは数量詞の遊離が可能であるが、格助詞がついた名詞からは不可能である。

(28) a. \*ジョンが学生から 3 人プレゼントをもらった。  
b. ジョンがピザを 2 切れ食べた。

- これら 3 つの格助詞と比較した後置詞の特性はすべて「のこと」にも当てはまる。1 つ目の特性については、すでに述べているように、「のこと」は格助詞「を」を後続することが可能である。2 つ目、3 つ目の特性についても以下(29)と(30)にそれぞれ示されている。

(29) 花子のごことは太郎が探している。

(30) \*太郎が学生のごこと 3 人探している。(cf. 太郎が 3 人の学生のごこと探している。)

- これらの「のこと」の特性をふまえ、「のこと」は単語レベルの名詞句内では後置詞の主要部に位置しており、「のこと」は DO マーカーとして、文法化の中で(24)における接置詞の段階にあると考えうる。日高(2006)は東日本の方言との比較により、「のこと」が格助詞化していることを主張しており、本発表の提案はその方向性を支持するものである。

- 以上の議論に従えば、(13)にみられた課題が解決される。

(13) a. なぜ「のこと」の出現が義務的である環境がないのか

b. なぜ日本語は既に対格の助詞「を」を保有しているが、役割が重複するように思える DO マーカーも文法システムに取り入れているのか

- ▶ (13a)については、「のこと」が DOM として初期形態にあるため、まだ完全に文法化していないと考えられる。
- ▶ (13b)については、「のこと」が「を」の後継者として選ばれているため役割は重複し、一時的に共存している状態であるといえる。

## 5. まとめ

本発表では以下の主張をおこなった。

- 現代日本語における「のこと」は DO マーカーである
  - ▶ 以下の観点に基づき、スペイン語の DO マーカーと高い類似性を示すことに基づいている。  
意味的類似点: ①有生性②定性  
統語的類似点: ①受動文主語②イベント名詞句内
- 現代日本語における「のこと」は対格の助詞「を」の後継者として選ばれた。

## 参考文献

- Aissen, Judith (2003) "Differential object marking: Iconicity vs. economy," *Natural Language and Linguistic Theory* 21, 435–483./Bárány, András (2018) "DOM and dative case," *Glossa: a journal of general linguistics* 3, 1-44./Bárány, András (2021) "Partially ordered case hierarchies," *Glossa: a journal of general linguistics* 6, 1–19./Bossong, Georg (1985) *Empirische Universalienforschung. Differentielle Objektmarkierung in den neuen iranischen Sprachen*. Tübingen: Narr./Bossong, Georg (1991) "Differential object marking in Romance and beyond," *New analyses in Romance linguistics: Selected papers from the XVIII Linguistic Symposium on Romance Languages*, ed. by Dieter Wanner and Douglas Kibbee, 143–170, John Benjamins, Amsterdam./Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT press, Cambridge, MA. /Fábregas, Antonio (2013) "Differential object marking in Spanish: State of the art." *Borealis—An International Journal of Hispanic Linguistics* 2.2, 1-80./Frellesvig, Bjarke, Stephen Horn and Yuko Yanagida (2015) "Differential object marking in Old Japanese: A corpus based study," *Historical linguistics: Current issues in linguistic theory*, ed. by Dag Haug et al, 195–211, John Benjamins, Amsterdam./Gelderen, Elly van (2011) *The linguistic Cycle*, Oxford University Press, Oxford./Heusinger, Klaus von and Georg A Kaiser (2005) "The evolution of differential object marking in Spanish," *Proceedings of the Workshop "Specificity and the Evolution/Emergence of Nominal Determination in Romance"*, ed. by Klaus von Heusinger, Georg A. Kaiser and Elisabeth Stark, 33–69, Fachbereich Sprachwissenschaft, Universität Konstanz./日高 水穂 (2006) 「文法化」『シリーズ方言学2 方言の文法』, 181-219, 岩波書店, 東京./López, Luis (2012) *Indefinite objects: Scrambling, choice functions, and differential marking*, *Linguistic Inquiry Monograph* 63, MIT Press. Cambridge, MA./López, Luis (2018) "Case and the event structure of nominalizations," *Linguistic Inquiry* 49, 85–121./Motohashi, Tatsushi (1989) *Case theory and the history of the Japanese language*, Doctoral dissertation, University of Arizona dissertation./Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: movement and unselective binding." *The representation of (In)definiteness*, eds. by Eric J. Reuland and Alice G.B. ter Meulen, 98-129, MIT Press, Cambridge. MA./Roberts, Ian (2022) *Diachronic syntax*, 2nd ed, Oxford University Press, Oxford./Sadakane, Kumi and Masatoshi Koizumi (1995) "On the nature of the 'dative' particle *ni* in Japanese," *Linguistics* 33, 5-33. Sadler, Misumi (2002) "From a pragmatic marker to a direct object marker: The Japanese particle *o* in written discourse," *Studies in Language. International Journal sponsored by the Foundation "Foundations of Language"* 26(2), 243-281./ Saito, Mamoru (2016) "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without Phi-feature Agreement," *The Linguistic Review* 33, 129-175./ Saito, Mamoru (2018) "Kase as a weak head," Ms. Nanzan University. /笹栗 淳子 (1999) 「名詞句のモダリティとしてのコト」『言語学と日本語教育—実用的な言語教育の構築を目指して—』, 161-176, くろしお出版, 東京./ Takano, Yuji (2003) "Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis," *Natural Language and Linguistic Theory* 21, 779-834./Yanagida, Yuko (2006) "Word order and clause structure in Early Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 15, 37–68./Yanagida, Yuko and John Whitman (2009) "Alignment and word order in Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 18, 101–144./湯本 かほり (2015) 『現代日本語における「こと」の研究—ノコト目的語および N ノコトダカラ構文を中心に—』 博士論文, 筑波大学, 茨城.